

大空への鎮魂

第 26 号 平成 26 年 (2014) 2 月 10 日

特定非営利活動法人
旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会
発行者 臼田 智子

新ホームページ
<http://www.okegawa-hiko.jp>

昨年 9 月、旧陸軍の飛行学校建物が残っていることを聞きつけた一級建築士が、工学院大学の建築学の教授を事務局に紹介してくれたので、現地を見ていただき、建物保存の方法についての意見書を作成していただきました。文化庁出身の教授による登録文化財に関する見解も含まれており、さる 1 月 29 日、桶川市役所に来庁して市長に提出するとともに、市の内部会議に出席して意見を述べていただきました。市は、取りまとめ業務をコンサルタントに委託しており、来年度中に具体的保存案を策定する予定です。



会報 18 号(H22.12)の表紙
料亭の慰問



中村輝雄 特別操縦見習士官 第 327 隊 特攻待機部隊

(昭和 20 年 5 月ごろ、面会に来た弟と格納庫裏で)

格納庫は、荒川に沿った川島町側堤防から河川側に直角に突き出た横堤を、下流側に少し崩した位置にあった。写真は、その荒川に沿う堤防の上で、現在のホンダ航空社屋を見下ろすような場所(南向き)で撮られた。後ろ左の小屋はウエス置き場。右上写真：銀座料亭の特攻隊員への慰問。ビールを差し合っている(分教場営庭で)。

右：日本語と英語で書かれた格納庫前の高札文面。格納庫は昭和 15 年 2 月 1 日に落成式を行っているが、高札は、その日付からして建築中に建てられたものとみられる。

【格納庫裏(土手側)の高札】
軍機保持之為ニ依リ
許可ナク之ヨリ内ニ立入り
又ハ之ヨリ内ノ測量
模写撮影等ヲ禁ズ
犯シタル者ハ国法ニ依リ
処罰セラルベシ
昭和十四年十二月

陸軍省

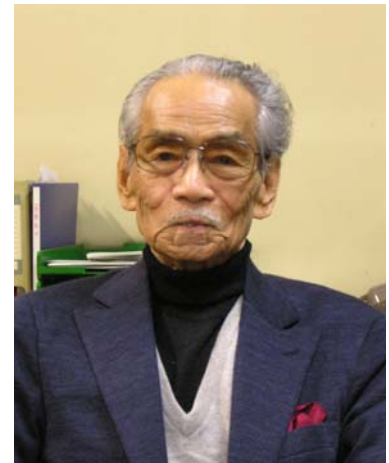
昭和20年5月1日、桶川で特攻第327隊の命令を受けた。第326隊、第328隊もいたような気がする。特攻待機部隊は4隊あった。325から328ではないか。

5月1日の11時ごろだったか、飛行機から通信筒が営庭に落とされ、特攻隊の編成命令が伝えられた。布達式があり、整列させられて、浅井少佐が、今から読み上げる者は一歩前を出ろといい、十何番かに私の名前が読みあげられた。327隊だった。自分たちで「天佑隊」と名前をつけた。隊長は岩間少尉。このときの特攻隊は1隊5、6人で4個隊、全部で20人ぐらいだった。普通3の倍数だから、1隊は6人かもしれない。326部隊は「一心隊」といった。沖縄が陥落したので、「振武」がなくなって、「神鷲隊第326特攻隊」と言うような名称になった。

実は、前の日に特攻隊員の名簿が無線で来ており、私はそれを通信兵に見せてもらった。その中に自分の名前はなく、ほっとしていた。だから、翌日、自分は呼ばれないと思ってぼうっとしていたところ、隣の兵隊に足をたたかれて気がついた。自分の名前が呼ばれていた。

午前中、命下布達式で特攻隊員の命令を受けたら、その日の昼食から、もう食事の内容に牛乳が付いたりしておかずが違っていた。嫌な気分だった。特攻隊員になったあと、近親者を呼べと言われ、シナ(中国)から弟を呼んで、一緒に写真を撮った(表紙の写真)。

第79振武隊員で林といったと思うが(注79振武隊に「林」はいない)、出陣で送ってくれたときに見かけた後輩に、俺はもう要らないからと言って、自分の腕時計を渡したのを見た記憶がある。格好いいなあと思った。二村源八は、「ふたむら」と読み、岩手教育隊で教官をしていた。元気のいい男だった。60余年も前の話になります。(平成17年11月に聞き取り。東京都在住)



大正11年10月4日中国の山東省青島チンタオの生まれ。本籍長野県。特操3期として昭和19年4月熊谷陸軍飛行学校本校に入り、8月ごろに岩手飛行場に移り、10月に桶川分教場。同年5月以降特攻隊員として訓練。昭和20年8月までいた。

特攻待機部隊について (解説)

千代田安由元整備員の証言や拝司総吉著「心乃饗宴」によると、特攻隊員は、あちこちの飛行場で秘密裡に訓練をしていたようです。昨年春(平成24年4月)に甥御さんが分教場に来られました。第79特攻隊員二村源八少尉は、岩手教育隊で教官をしていた(中村輝雄氏証言)が、桶川に来る直前は特攻訓

練をしていました。2、3週間ずつの移動のようですが、第79振武隊は、桶川に1か月いた(同書)ようです

平成17年8月NHKテレビの首都圏ネットワークで桶川飛行学校のことが放映されたあと、これを見た中村輝雄さんが担当のNHK記者に宛てた手紙が転送されてきました。

『私は昭和 20 年 5 月 1 日、桶川教育隊(紺 540 部隊)に於いて、陸軍特別攻撃隊第 327 飛行隊の命下布達を受けました。当日編成された 4 ヶ隊のうち、第 326 飛行隊には遠藤豊吉がおりました。福島県二本松の出身で・・・』(以下略。遠藤氏は戦後、NHK ラジオで、子ども相談室の回答者をしていたので、そのことが書かれていました)。

その後、事務局で直接中村さんに文書で照会したところ、中村さんが編成に加わった 327 隊は 3 月に編成された第 79 飛行隊に次ぐ第二陣の特攻隊で、隊長は岩間少尉だったこと、79 振武隊は 3 月 27 日に下命があり、出発 2 日前の 4 月 3 日、拝司少尉が外されて上野實伍長が入ったことも書かれていました。そして、残部隊は札幌に向かった、ともありました。

平成 18 年、群馬県の特攻隊を研究していた、元特幹(特別幹部候補生、水戸・長岡教育隊)1 期生の元伊香保町町長・深井正昭さんの協力で、表のとおり、桶川に駐留していた待機部隊が分かりました。中村さんは、「第 326 隊に遠藤豊吉…」と書いていましたが、『陸軍航空の鎮魂 総集編』によると、「遠藤豊吉」は 327 隊です。同書で、通し番号で 317 隊から 330 隊までは編成地が「熊谷・狭山」となっています。表をご覧ください。

中村さんは、桶川で 325 から 328 の 4 個隊が編成されたのではないかといい、「十何番目かに私の名前が読みあげられた」とすれば、6 人ずつですから、325、326 もあったと考えるのが自然です。つまり、この時期、325、326、327、328 の 4 つの特攻隊が桶川で編成されたということになります。

それを裏付けるように、轟勲(とどろき いさお)さんの手記にも、次の記述があります。

「3 月末、特攻隊 4 隊が、この桶川基地で決定した。隊長 1、特操士官 4、下士官 1 の 6 機の編成で、私は第 1 航空司令部付き第 327 特別攻撃隊員に選ばれた。隊長岩間虎彦少尉、丸山泉、山崎光朗、中村輝雄、轟勲の 4 見習士官、石川元二郎准尉が第 327 隊の編成で…」。(注「3 月末」は「4 月末」の記憶違いか。手記は会報第 17 号に掲載)

生田惇『陸軍航空特別攻撃隊史』によれば、「陸軍は、沖縄作戦の遂行に努力するとともに本土決戦に備えて特攻隊の編成を急いだ。3 月末までに編成された約百の特攻隊は沖縄戦で消尽する見通しが強い…(中略)…昭和 20 年 4 月、航空総軍は 314 隊にのぼる特攻隊の仮編成を命じた。今後 6 月末までの飛行教育終了者を胸算用しての措置で・・・」(228 ページ)とあります。そして、その後の特攻隊はそれまでの 12 機編成から 6 機編成に改められたとの記述もあります。確かに、桶川に駐留していた 94 振武隊は 20 年 3 月編成で 12 機ですが、同年 5 月以降に編成された隊は、いずれも 6 機編成となっています。

また、この時期からの特攻隊の隊員の出身は、それまでの下士官(軍曹、伍長)から、「見士」(特別操縦見習士官=「特操」)が多くなり、「特 1」「特 3」のように、まだ教育途中と思われる者が多くなってきています。特操 1 期生は昭和 18 年 10 月に各地の教育隊に入校し、1 年か 1 年半で少尉に任官しましたが、20 年 3 月では少尉になったばかり、特操 3 期は昭和 19 年 4 月入校で、まだ任官もしていない隊員です。まさに、「飛行教育終了者を胸算用しての措置」で、生田氏は、「航空士官学校出身の特攻隊長要員が枯渇して、特攻隊長の主力が陸軍士官学校出身者で航空に転科した者、および特別操縦見習士官出身者に移

っている…」(同 230 ページ)と書いています。

特攻隊に供給すべき飛行機も不足していました。桶川から知覧に向かった第 79 振武隊の使用した飛行機はどのような指揮命令によって供給されたのか明らかではありませんが、佐藤新平隊員の手記によると、熊谷本校(3月28日)、灰山飛行場(同30日)、航空士官学校(4月1日)などに飛行機を受け取りに行き、つまり、あちこちからかき集めて、命令の日から数日後の4月1日若しくは2日に

12機揃うこととなります。それも、九九式高等「練習機」です。生田氏によれば、「特攻隊の装備機は、編成担当部隊の飛行機を食いつぶして充当されたものが多い」(231 ページ)といえます。

なお、表にある「第 94 振武隊」は、隊長が藤田一慶少尉で、前号の表紙で紹介しましたが、藤田少尉は「特別志願将校」、北海道出身らしいというだけで、現在のところ詳細は不明です。(事務局)

桶川に駐留していた特攻隊の待機部隊		出典「陸軍航空の鎮魂 総集編」平成5年4月 陸軍航空碑奉賛会						
隊号	機種・数	隊 員						記 事
94 振武隊	95式 練習機 12名	少尉	藤田一慶	志19	少尉	野口正夫	幹9	編成担任部隊 53航空師団 編成担当部隊 第9練習飛行隊 編成時期 昭和20年3月 配属先の異動 立川→桶川→黒石原 (*くろいしばる 熊本) 所在 黒石原
		少尉	五十嵐磐雄	特1	少尉	持田清一	操	
		曹長	石山正信	少6	伍長	阿部昌信	昭18	
		伍長	藤井良應	昭18	伍長	相場 章	少15	
		伍長	平田昭一	少15	伍長	末崎与助	少15	
		伍長	佐藤宏平	少15	伍長	小川秀幸	少15	
325	95式 練習機 6名	少尉	高橋敬三	特1	軍曹	宮本政二郎	昭14	編成担任部隊 52航空師団(*熊飛校) 編成担当部隊 第39教育飛行隊 編成時期・編成地及び移動先 昭和20年5月狭山・熊谷 配属先・配属予定・配属日 第1航空軍 7月30日 52航空師団
		見士	宇田川嘉東	特3	見士	是金 寛		
		見士	伊藤政武		見士	原田耕二	特3	
326	95式 練習機 6名	少尉	米山隆三	特1	軍曹	石上次夫	予	
		見士	間瀬仙之助	特3	見士	穴見 薫		
		見士	徳長隆美		見士	正保輝志	特3	
327	95式 練習機 6名	少尉	岩間虎彦	特1	曹長	石川元次郎	昭12	
		見士	丸山 泉	特3	見士	山崎光朗	特3	
		見士	中村輝雄		見士	轟 泰治	特3	
328	95式 練習機 6名	少尉	安田直時	特1	軍曹	宮崎清光	昭14	*印 編集で加筆
		見士	中島 豊		見士	遠藤豊吉		
		見士	後藤 晃	特3	見士	河窪啓二		

(注) 右上の書籍からそのまま引用したものであるが、94、327、328隊については、関係者の証言もあり、桶川に駐留していたことが確実。327隊の轟泰治は、轟勲の誤りで、轟勲氏の手記がある。泰治と勲は同期で同郷。中村輝雄も手記があり特3(特操3期)。「安田少尉」名の辞世の句の色紙が残っている。

325、326部隊は、中村、轟の証言によると、桶川で編成されたか、少なくとも駐留していたと推測される。94振武隊の藤田一慶少尉については、会報25号表紙で紹介した。

<凡例>

- ・「編成担任部隊」＝編成を管理した上部機関。
- ・「編成担当部隊」＝特攻隊を直接編成した部隊。
- ・「第39教育飛行隊」＝千葉県横芝から本土防衛作戦のため埼玉県狭山飛行場に移駐した。
- ・出身期別
志 特別志願将校 幹 幹部候補生 特 特別操縦見習士官(数は期別)
少 少年飛行兵(数字は期別) 予 予備役下士官 昭 昭和年度の徴収兵
- ・「見士」は(特別操縦)見習士官。曹長とされ、将来の少尉任官が約束されている。

少年時代の川田谷飛行場の思い出

中島 昭次 (少飛 15 期乙)

あれは確か昭和十三年か十四年の秋頃、私が十三歳か十四歳頃の事だった。あの頃は今と違って宿題もなく、学校が終わると近所の仲間達と集団で遊びまわっていた。



ある日、仲間の一人が「川田谷という所に飛行場が出来たそうだ」という話を大人達がしていると情報をもってきた。彼の話によると野本村(現 東松山市野本)の先の荒川の中で、「かわたや」という所らしい。

「飛行機が見てえな」「野本迄は判ってるから行ってみべえか」と皆で話がまとまり、次の日曜日に四、五人が親に内緒にして自転車で出かけた。

ふるこおり
古凍までは一直線で行けたが、その先が判らず道端の自転車屋で聞いた所「その角を曲がってしばらく行くと神社がある。その辺でまた聞いてみろ」と言われたので行くと確かに神社があり、境内に小学生くらいの大きな猿が飼われており、棒切れで突つくと牙をむき出しにして怒るので、それが面白くて交代で猿を怒らせて、ここで大分時間を費やしてしまった。

途中「腹が減った。弁当だ」と昼前に梅干し一つのむすび(おにぎり)弁当でも話が弾んで時間を費やし、途中「飛行場はどこだんべえ」と聞きながら行くと、目の前に大きな土手が現れたので、その土手に向かっていくと、

会のホームページを更新しました！
メールも打てます。感想をお寄せください。

* 桶川分教場は、地元ではその地域名から「川田谷飛行場」と呼ばれていた。

突然、彼方の土手の内側から、二枚羽の黄色い色をした飛行機が飛び立って行った。「あすこだ」と疲れも忘れて飛行機の飛び立った土手に向かって一散に自転車を走らせた。

土手の上へ私一人が駆け上がって偵察すると、広い河原の下流に何かテントのような物が幾つか見え、近くには「赤トンボ」と言われる、さっき飛び立ったと同じ飛行機が何機か見えたので、「もっとしもだあ」と皆に指差して土手を駆け下りて又自転車に乗り、土手沿いに下流に向かうと、土手に坂道が作られており、土手を登り切ると視界が一拳に広がった。(注 滑走路は河川敷にあった)

河原は細長い州のように上流から下流まで平らになっており、手前に白いテントが三張りか四張りあり、その付近に兵隊さんが数名いて、そこから少し上流に赤トンボが何機か駐機しているだけだった。

あまりにも飛行場とは思えない、貧弱な、そして小さな飛行場で皆ガッカリし、「ちっちゃい飛行場だな」「ひよこ見たいな飛行場だ」と口々につぶやいた。

中島昭次 (なかじま しょうじ)

昭和2年2月埼玉県比企郡松山町(現東松山市)生れ。分教場から約13キロ北東の方向。

少年時代に陸軍熊谷飛行学校や同校桶川分教場を見学して飛行兵にあこがれ、昭和18年11月少年飛行兵第15期乙生徒として尾上教育隊(通信・兵庫県)に入校。19年4月新田原教育隊(宮崎)、10月都城西飛行場(同)に配属。20年6月から終戦まで知覧飛行場に配属されて通信業務に従事し作戦室にも出入りした。すでに沖縄への特攻はなくなり、米軍の九州上陸に向けての作戦に入っていた。終戦間際、本土決戦に向けた「本土決戦の構え」なる訓示が伝えられた。平成25年4月、知覧特攻平和会館調査員の2日にわたるインタビューに応じた。

皆ががっかりした原因は、当時私達の小学六年の遠足は東京見物で、そのコースの中に羽田飛行場が含まれており、私も春の遠足で、今は飛行場の中心になっている穴守稲荷の境内の立木に、鳩より大きい鳥が卵型の白い巣を幾つも作っていた事や、飛行機は見えなかったが格納庫が二棟くらいあり、広い飛行場は一面の芝で覆われていた事などを記憶していて、つい羽田飛行場と比較してしまったのだった。

だが、午後の訓練が始まったのか、テント付近の兵隊さんの数が多くなり、爆音も聞こえて来るようになって、やがてテントの影から爆音を轟かして練習機が飛び立つと、私達も踊り上がって「飛べ、飛べ、全部飛べえ」と一斉に手を振り、跳び上がって声援を送った。間をおいて一機、また一機と、川上に飛び立って行くたびに、我々は生まれて初めての熱狂と興奮状態になって、時の立つのも忘れていた。

そのうち飛行機は全く離陸しなくなり、テント付近の兵隊さん達の姿も見えなくなったが、私達は午後の飛行訓練が終わったのを気づかずに、いつまでも飛行機の飛び上がるのを待っていた。

ようやく諦めて、誰かが「帰るべえか」と言い出した時には、もうだいぶ夕暮れが迫っていた。腹も減ってきたので、私たちは、元来た道を辿りながら帰途につくことにした。だが、帰り道は、川越の方向に行ってしまう、

何か来た道と違うような気がして引き返したが、途中から暗くなってしまい、もう、東西も分からず田圃の道で皆泣きべそ状態だった。道端の家で道を聞くと「あんちゃん達、この道を行くと川越だよ。松山へ帰るんならこの道を逆に半里位戻って、二股になった所を左に曲がって、また聞いてみな」と教えてくれた。しかし、道が分かれる所は幾つもあって、おまけに真っ暗闇に加え、周囲は田圃ばかりで人家が無く、何回も何回も田圃に落ち、皆散々な目に逢った。

ようやく灯火の見える家があったので、松山への道を聞くと、親切に道まで出てきて、「松山はこの道をまっすぐ行って股になっている所を左に曲がり、後は四ツ辻を右へ右へと曲がれば、でっかい大通りに出るから、その大通りを右へ真っ直ぐ行けば松山だよ」と親切に教えてくれた。

我が家へ近付くと、何か提灯や懐中電灯の明かりが見えて、騒々しい。「何かあったのかなと思いつながら行くと「居たぞ。返って来たぞ」という声があちこちで聞こえて来た。

「ああ、腹が減った」と我が家へ帰ると、親父が飛んできて「馬鹿野郎、何処で何をしていたんだ。人様をお騒がせさせて」と散々叱られた。後で判ったことだが、子ども五人が朝、家を出たきり家に帰らないと、近所の人たちが心配して町中を探し回っていたという。携帯電話も標識、街灯もない、しかし、古き良き時代の思い出である。（東松山市在住）

<編集後記>

今、話題の映画「永遠の0(ゼロ)」をご覧になったでしょうか。昨年11月、飛行学校に見学に来た年配の女性が私に「特攻隊って自爆テロだったんですね」と話しかけてきました。映画でも、特攻隊員だった祖父のことを調べている大学生の主人公が、友人からそう言われるシーンがあります。特攻隊と自爆テロの違いを十分説明して理解してもらえるようであれば、後世に「語り継いだ」ことにならないのではないかと、暗い気持ちになりました。(S)

特定非営利活動法人

旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会 会長 臼田 智子
(法人住所) 桶川市西2-4-21 会員 130名
[事務局] 〒350-0133 埼玉県比企郡川島町表403(鈴木)
電話(携帯)090-2554-7429 入会は郵便振替で
番号 00120-8-297950 に「年会費」振り込み。
名義「旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会」
通信欄に「入会申込」と記入。できればコメントも。
年会費 2,000 円。振込料不要の用紙希望は電話か HP からのメールで。会報「大空への鎮魂」年4回 250部発行。
会のホームページ: www.okegawa-hiko.jp